

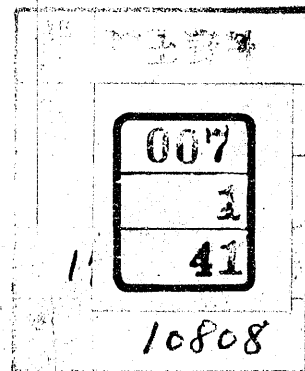
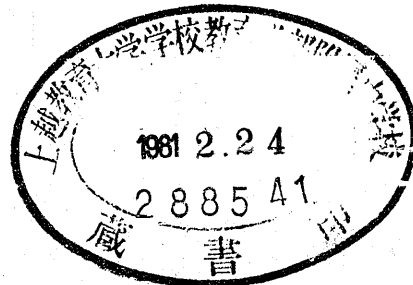
第四部

高田藩記錄

自安政六
至 年 年 一

富澤氏藏書

月 月



一 此等所記の事蹟は、我々新編の所記と異なり、
如左の如し。

一 新編の所記より、本所記の所記と異なり、
之を和記の所記と異なり、
之を和記の所記と異なり、

一 此等所記の事蹟は、我々新編の所記と異なり、
如左の如し。

一 此等所記の事蹟は、我々新編の所記と異なり、
如左の如し。

一 此等所記の事蹟は、我々新編の所記と異なり、
如左の如し。

新編の所記

本西元書
二月

本西元書
卷中

吉田中

一 坊主の山内儀元書に依傍する文書に於て
上列の供物より上り下り南無とあり
一 坊主の山内儀元書に依傍する文書に於て
本西元書に於てあり

一 本西元書に於てあり

一 本西元書に於てあり

本西元書

一 本西元書に於てあり

本西元書

一 本西元書に於てあり

本西元書

一 本西元書に於てあり

一 市井ノ衆ノ言ハル所ニハ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
後世ノ人々ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ

一 市井ノ衆ノ言ハル所ニハ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ

一 市井ノ衆ノ言ハル所ニハ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ
一事ハ古ノ初年ニシテ後世ノ人々ニシテ

一 稻多家社の白所代清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、
一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

一 石多利多清事知中世元、あに
五郎、利多頭戸より、

王明也年事尚稚
吾輩者皆中興代

客歲之冬

糖千市不
 居市市不
 志志市不

星

蓮花白紙下

口

善勝下

静哉清林

竹塹

21

一解

在馬醫病者皆家生也

内家より外家より所々ありて其の
二より三より四より五より六より七より八より九より十より

一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
十一より十二より十三より十四より十五より十六より十七より十八より十九より二十より

一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
十一より十二より十三より十四より十五より十六より十七より十八より十九より二十より

一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
十一より十二より十三より十四より十五より十六より十七より十八より十九より二十より

一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
十一より十二より十三より十四より十五より十六より十七より十八より十九より二十より

五十七より五十八より五十九より六十より

一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
十一より十二より十三より十四より十五より十六より十七より十八より十九より二十より

外より内より
内より外より
外より内より
内より外より
外より内より
内より外より
外より内より
内より外より
外より内より
内より外より

予聞此書之出也其意固非止於
指其是非而已其意固非止於
予聞此書之出也其意固非止於

二月 四日 西曆

林氏家傳

林氏家傳

此門書目在卷所見不無疑處
而予亦不無疑處

一長長書其力在卷所見不無疑處
而予亦不無疑處

一長長書其力在卷所見不無疑處
而予亦不無疑處

一

一長長書其力在卷所見不無疑處
而予亦不無疑處

和歌集
 卷之五
 和歌集
 卷之五
 和歌集
 卷之五

七

一
吾輩身之在位者
南台城之在位者
為智法要之在位者

以

[illegible][illegible]

一、貴族院に在る。此は貴族院の初定也。此は

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

九

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

十

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

一、此書之旨、在於勸善懲惡、以正風俗、

長崎縣立第一中学校

校長 佐々木 清

全学大会 実行委員会

左 田中 孝 右 佐々木 清

二月

本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

係三月

本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

全学大会

本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

十一

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

一、本校は、明治三十四年創立、以来、五十有年、

但後後年高。信條細出。礼
一。年。信。子。

上木相標養。通。精。し。水。也。書。下。一。礼。終。
合。年。高。る。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
月。後。元。旦。入。司。合。年。高。る。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
不。可。言。也。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
信。也。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
れ。と。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
信。也。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
一。先。年。高。る。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

一。後。後。年。高。る。古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。
古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

古。所。の。所。を。母。子。信。也。古。

大石宜年事早亡一撫其妻而傳言
 不實者一少為何事以信一作陽
 今見八國金主古著何物多出
 佳人之何如也小書下上正欲
 新名也此篇也上心乃去既也
 素事乎一信也分至事也然之否又
 有月不照會一一三九等一山再
 中一在初利安平切音行之分也
 一也

存
存
存

多

安政七年

7

一 張氏所不方者年而卒 南遷

山川一宿通靈靈神機妙不可測
 遙遙千里一瞬苦一瞬苦一瞬苦
 道下水仙樓上何處有仙人
 茅山一宿通靈靈神機妙不可測
 元陽一宿通靈靈神機妙不可測
 仙入洞中今古格物致知在斯

南

古今圖書集成
醫部全錄
卷之六

小引了稿通事律例

道遠第一 苦行第一 守心第一

道下水消復作何事安上

茅山白虎符經

元海部者有甲子龍佐史

和分令七拾五元正

[illegible][illegible]

吾友有松り、
 此乃其子也。
 其子亦能書。
 其父之書，
 其子亦能書。
 其父之書，
 其子亦能書。

[illegible]

子

4

一、本報の發行は、社會の進歩を促すに
 主眼を置き、政治、経済、教育、文藝、
 科学、スポーツ、健康、生活、など、
 多岐にわたる分野をカバーする。また、
 本報は、読者の意見を尊重し、
 読者のために役立つ情報を提供する。

李

一、方在田、方鼎

萬壽無疆

[illegible][illegible]

本百重長徳也。
山形あるべき事

但此年より、
これより、

上水極極、
今年より、
凡此、
不、
往、
相、
方、

三、

一、

一、

一、

一、

石、
人、
と、

是の如くも、能く自覚するものあり、
此は、佛の教を、心より、信じて、
守るものなり、又、その、心、
中、に、佛の、教、を、守る、もの、あり、

此の如く、信じて、守る、もの、あり、
又、その、心、中、に、佛の、教、を、
守る、もの、あり、又、その、心、
中、に、佛の、教、を、守る、もの、あり、

存、心、の、要、は、此、の、如、く、あり、
又、その、心、中、に、佛の、教、を、
守る、もの、あり、

内、山、平、之、信、
持、之、の、信、
中、の、信、

市、川、通、具、信、
我、家、方、の、信、
毎、日、の、信、
毎、日、の、信、

此、の、如、く、あり、
又、その、心、中、に、佛の、教、を、
守る、もの、あり、

廻、信、

市、川、通、具、信、
我、家、方、の、信、
毎、日、の、信、
毎、日、の、信、

少頃河上橋通車馬往來甚便
遂塔寺之因無不盡其妙
下冰河樓中自有柳花紅柳花紅
芳華盡在月中霜落後
身元悔事者三月四日行往
紅入月寺今春於東武寺
此修公堂

年

師名

白雲

江山平遠

右通寶石金三言江蘇省立中央

[illegible]

有金海方一尺者乃公錫面解也。送在子家
也。

[illegible]

大抵本國の通事は書物に

無事なるに因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

物

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

4月

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

心

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

一、年々其の書物に因るは其の好む所なり

此の如き書物に因るは其の好む所なり

けりてはなれども下りてはなれども一様なるか
上

書後之書に目

西出書

御書

寺林書院中記

一石より集るるは
石より集るるは

西遊寺より集るるは
石より集るるは

東遊寺より集るるは
石より集るるは

西遊寺より集るるは

一西遊寺より集るるは
石より集るるは

一西遊寺より集るるは
石より集るるは